様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１０４６

研究課題名（和文）11・12世紀アングロ・ノルマン王国における境界地域の貴族間ネットワーク

研究課題名（英文）Aristocratic networks in the border area of the Anglo-Norman realm

研究代表者
轟木　敦子（中村敦子）（Nakamura, Atsuko）

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：００４１３７８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではチェスター伯ヒューの家臣ロバート・オヴ・リズランの研究、レナルフ2世のウェールズ境界とブルターニュ境界をつなぐネットワークに着目した研究をまとめた。ロバートは征服前からイングランド宮廷に関わり、征服後はウェールズ境界地域で活動する一方ノルマンディとも関係を維持した。また、レナルフ2世はウェールズ内の政治活動に介入するだけでなく姻戚関係や修道院への寄進関係などで長期的な関わりを構築していた。さらに、レナルフ2世の宮廷に集った人々の中には、ブルターニュ境界を拠点とするウィリアム・フィッツアランがおり、ウェールズの境界地域とブルターニュの境界地域の人的ネットワークの存在を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義は、アングロ・ノルマン期社会における境界地域相互のネットワークの実態を明らかにした点である。ウェールズとイングランド間の「ウェールズ辺境」がチェスター伯家を中心としたネットワークにより、イングランド側とウェールズ側とつなぐ役割を果たし、ブルターニュ境界地域とも関係を維持していたことを明らかにし、境界地域のネットワークの拠点としての役割とその具体的内容を指摘できた。社会的意義として、現代社会における境界地域を考察する際の比較材料の一例を提供できた。国家間、地域間における文化的社会的相違に基づく対立をどのように理解することができるかについて比較材料となりえる成果といえよう。

研究成果の概要（英文）：This research has focused on two points related to the family of the earls of Chester: Robert of Rhuddlan, a tenant of Earl Hugh, and the network connecting the Welsh March and Brittany-Normandy borders under Ranulf II. Robert of Rhuddlan had been involved with the English court before the Norman Conquest, and after the Conquest he was active in the Welsh border while also maintaining relationships with his country of origin, Normandy. Ranulf II, who has usually been focused on his activity under the Anarchy in England, not only intervened in political activities in Wales, but also built long-term relationships through marriage ties and religious gifts to monasteries. Furthermore, among those who gathered at Ranulf II's court was William FitzAlan, who was based on the Welsh March, originally from Brittany-Normandy frontier area, where also the Goz-earls of Chester family was based on, thus indicating the existence of a personal network between the Welsh and Brittany border areas.

研究分野：西洋中世史

キーワード：西洋中世史　イングランド　ノルマンディ　ウェールズ　貴族　証書史料

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究ではアングロ・ノルマン期有力貴族のチェスター伯の中でも 12 世紀前半に活躍したレナルフ 2 世をとりあげた。彼に関する研究は複数公表されており、すでに多大な注目を浴びてきた人物だが、19 世紀末のＪ・Ｈ・ラウンド以来のスティーヴン王時代におけるレナルフ 2 世の行動やＰ・ドルトンが指摘したような、レナルフ 2 世と周辺の有力貴族との関係に光が当てられる一方、レナルフ 2 世自身の宮廷、また彼自身のとりまき、彼とつながりを持つ人々についての具体的な研究は少ない。そこで、彼がそれぞれの人間たちとどのような関係を個別に築いていたのかに光をあてることで、彼の権力がどのような人間関係によって構築、また維持拡大されていたのかを考えたい。ここでは、そのような人間関係を広くネットワークと呼んでおく。

1988 年のＧ・バラクラフによるチェスター伯家の証書集の刊行に伴い、1991 年には、Ａ・サッカー編でチェスター伯家とその証書集に関連する論文集が刊行されたが、そこではＤ・クラウチがチェスター伯家のハウスホールド役人たちについて、証書集から役職名を持っている人物たちに注目し、チェスター伯家のハウスホールドに関する重要なテーマを扱っている。だが、今回はそれらチェスター伯家の家政に直接関わる役人たちではないにも関わらず、レナルフ 2 世の証書に登場する人物たちに着目した。

まず、研究史を確認する。レナルフのネットワークで注目すべき研究として、Ｊ・グリーンとＰ・コスの研究があげる。グリーンは、レナルフ２世の証書を利用し登場している人物たち数名を分析した。グリーンは彼らはレナルフと多種多様な形での関わりをもっていた人物たちであると述べている。つまり、そこには「新人、ハウスホールド役人たち、土地保有者たち、親族、同盟者、そしてまた別の貴族たち」というように、チェスター伯家の封建家臣であったり、役人だったり、という以外にもざまざまな関係を持つ人々であった。この指摘はレナルフの宮廷が多様なネットワークの場となっていたことを示していよう。グリーンは、レナルフ 2 世の宮廷における土地保有関係以外のネットワークの存在の可能性を指摘することになった。だが、それ以上は踏み込んでいない。

そしてコスは、これまでの研究がレナルフを検討する際、レナルフと君主たち、あるいは近隣有力貴族といった有力支配層群に注目していたのに対し、レナルフ 2 世が勢力を伸長していったイングランド中南部コヴェントリを舞台に、レナルフが当該地域に勢力を根付かせるために現地の中下層貴族たちとの関係構築を工夫していたことを指摘した。コスの研究は、ある地域を対象に、その地域に基づく貴族間関係のありかたを精査したものだが、地域が限られており、他の関係性にも目を向けなければならないだろう。

２．研究の目的

これらの研究状況を背景に、本課題では、レナルフを内乱期貴族とみなす前提ではなく、そしてスティーヴン対マティルダ、あるいはイングランドという国家における有力貴族という枠組みを取り払った形で考える際、彼がどのような人間関係の束の中で自身の支配を維持していたのかを考察したいと考えた。

その際、レナルフ 2 世の拠点であるチェシャーが位置するウェールズ境界地域における貴族間ネットワークという枠組みを設定した。具体的にはイングランドとウェールズの境界、そしてノルマンディとブルターニュの境界を対象とした。それは、筆者がこれまで研究対象としてきたチェスター伯家のノルマンディとイングランドにおける所領の拠点の一部

がそれぞれの地域にあり、チェスター伯家と同伯家に関わる貴族たちはそれぞれの地域でどのような活動を行っていたのか、どのような関係性を持っていたのかを調査するためである。

３．研究の方法

今回の研究課題の主な研究成果としては、チェスター伯ヒュー1 世と近しい家臣でありまた親族関係にもあったロバート・オヴ・リズランについて、近年新しい研究成果が公表されたオルデリク・ヴィタリスの『教会史』を利用しつつ、その主人であるチェスター伯ヒューとの関係やノルマンディのサンテヴルール修道院との関係を探った。なお、このロバート・オヴ・リズランについての論考は現在投稿中である。そして第 91 回西洋史読書会大会では、「チェスター伯レナルフ 2 世再考」として、12 世紀半ばアングロ・ノルマン王国が内乱期とされている時代におけるチェスター伯レナルフ 2 世を中心とした彼の宮廷の人的ネットワークを検討した。分析の途中ではあるが、この報告における研究の方法と成果を本課題の最終成果報告としてまとめておく。

方法について述べる。王族、高位聖職者、あるいは大貴族などは年代記等叙述資料に現れるが、彼らをとりまくレベルとなると、叙述資料に現れることはほとんどない。したがって、レナルフ 2 世のネットワークを明らかにする資料はレナルフ 2 世の証書資料の、とくにその証人リストに現れる人物名となり、彼らをできるかぎりたどることになる。修道院への寄進や後世の資料からさかのぼるなどの作業も必要となるが、今回はチェスター伯家の証書集にしぼり、複数の人物を拾い上げる作業を行った。同証書集には最初のヒュー1 世から最後のジョンまでのチェスター伯、また伯妃が発給した証書やチェスター伯家の寄進行為を承認した君主の証書も含まれている。ほぼ真正文書とされ、全体で 463 通の証書がおさめられており、その中でレナルフ 2 世のものは 114 通である。

４．研究成果

114 通のレナルフの証書のうち、名前がわかる証人数としては、354 人を数える。登場回数が多いのは、クラウチが紹介したレナルフ 2 世の宮廷で役職者たちである。では、そのような役職者ではない場合、どのような人々が集ったのだろう。ここでは特徴的な人物複数名を例としてとりあげておく。

（１）登場する人物たち

ノルマン・ド・ヴェルダン　Norman de Verdun：レナルフ 2 世の証書に 18 回証人として登場する。18 回はハウスホールド役人の中でも回数の多いレナルフのカペラーヌスに続くものであり、役職を持たない人物としてはもっとも登場回数が多い。出身はノルマンディ西部の都市アヴランシュのそばとされている。モンサンミシェル修道院のカーチュラリにこの家系のベルトラム・ド・ヴェルダンが登場していることがわかっている。ノルマン・ド・ヴェルダンのおそらく祖父と思われるこのベルトラム・ド・ヴェルダンが、ドゥームズデー・ブックに登場している。彼はイングランド南部にわずかな土地を支配していたらしいが、それは王から直接保有しているものである。子孫ノルマン・ド・ヴェルダンはレナルフ２世の証書全般に登場するようになったが、レナルフ 2 世との土地保有関係は不明で、チェスター伯家の菩提修道院であるセント・ワーバラ修道院への寄進も不明である。年代記等においても名前を確認することができない。しかし、レナルフの時代全体にわたり証書に登場することから、宮廷に定期的にあらわれていたことがわかる。これは、ノルマンディにおけるヴェルダン家とチェスター伯家の出身地の近さがこの関係のもととなっているのかもしれない。

レナルフ 2 世の時代にチェスター伯家の宮廷に参加するようになり、その後子孫たちもチェスター伯家に出入りするようになったものであろうか。

ロバート・バセット　Robert Basset：ノルマンディ西部ドンフロンそばの出身と考えられる。バセット家はドゥームズデー・ブック段階でイングランドに5か所ほど土地を保有しているが、広大ではない。ヘンリ1世期の「新人」の台頭との1例と考えられている。バセット家は、ヘンリ1世以降、裁判官として台頭するが、レナルフの証書に出てくるロバートは、王の裁判官等の役職保有は不明である。また、その息子と思われるリチャード・バセットは、チェスター伯ヒューの孫娘と結婚し、姻戚関係を持つ家系となった。したがって、バセット家も、ノルマン・ド・ヴェルダンのように、ノルマンディの出身地の近さがチェスター伯家とのつながりの理由の可能性がある。レナルフ 2 世の時代にチェスター伯家の宮廷に現れるようになり、姻戚関係を結んだ可能性がある。

ウィリアム・フィッツアラン　William Fitz Alan ：証書への登場回数はわずか3回だが、政治状況を背景としたレナルフのネットワーク形成の一例として注目される。彼は、ブルターニュ東部出身のアラン・フィッツフラードの息子で、ウェールズ境界地域のシュロップシャーに拠点があった。1130 年頃グロスター伯ロバートの姪、あるいは親族と結婚しており、チェスター伯レナルフ2世もグロスター伯の娘と同じ頃結婚しているため、どちらもグロスター伯と姻戚関係というつながりがみられる。

グロスターシャーはやはりウェールズ境界地域である。また、グロスター伯は、ノルマンディ中部に拠点をもつロベール・フィッツ・エイモンの娘と結婚していたが、ノルマンディのこの地はチェスター伯の拠点でもあった。そして、ウィリアム・フィッツアランの出身はノルマンディ西部で、この地は、ヘンリ1世がイングランド王位を継承する以前、兄であるノルマンディ公ロベールから買い取った地域であり、チェスター伯初代のヒューの拠点でもあり、ヒューは王となる前のヘンリ1世を支持していた、という関係を指摘できる。そして、ウィリアム・フィッツアランは1138 年にグロスター伯に従って早くからスティーヴンへの忠誠を翻しアンジュー側へと移動したグループの一人であった。

さて、レナルフの証書には、レナルフからウィリアム・フィッツアランが、自分が保有しているチェシャーの所領をシュルーズベリのセント・ピーター修道院に寄進することをレナルフが認める証書がある。シュルーズベリ修道院は、シュルーズベリ伯ロジェ・ド・モンゴメリが建立した重要な修道院であった。なお、ウィリアム・フィッツアランは、シュルーズベリ修道院からそれほど遠くない地にホーモンド修道院を建立し、同修道院には、レナルフ2世も寄進している。ウィリアムが没すると彼はシュルーズベリ修道院に埋葬された。

興味深い点は、レナルフの証書の中に、混乱の間においても、チェスターのセント・ワーバラ修道院と、シュルーズベリ修道院の権益を互いに維持補完する、という取り決めをした証書があることである。(CEC, nos 61)　これは、政治的混乱の際の相互利害を維持するためのものであり、両修道院の近しい関係をうかがわせる。ウィリアム・フィッツアランは、1138 年にスティーヴンに対しシュルーズベリ城で反乱を起こした。すぐに鎮圧され、ウィリアムは逃亡、おそらくグロスター伯ロバートのもとに身を寄せた（CEC, no85)。その後もマティルダ側におり、1153 年にはヘンリ 2 世の継承が確実化すると、失ったシュルーズベリの権益を取り戻している。

この間、おそらく 1147 年から 48 年にかけての頃、1147 年 10 月にグロスター伯ロバートが没した後、レナルフ 2 世がマティルダ側の中心的貴族としての存在感を持つようになった頃、レナルフ2世の宮廷にマティルダ側の貴族たちが集まった際の証書に、ウィリアム・

フィッツアランが登場しているのである。グロスター伯ロバートとのつながりを介したレナルフ２世との関係が、レナルフがスティーヴン王のもとにある間も完全に断絶したのではない、あるいは再度復活した可能性がある。

カドワラドゥル　Cadwaradr:もう一人、証書への登場回数は少ないが、レナルフのネットワークを示す例として、カドワラドゥルをとりあげよう。彼は北部ウェールズのグヴィネッズの王族の出身で、兄オウァインと争い、自身も王を名乗るが、王位を得ることはできなかった。しかし、王位を主張し活動する中でレナルフと協力関係となったと思われる。

カドワラドゥルは、レナルフ 2 世が 1141 年のリンカンの戦いでスティーヴンを攻撃した際、ウェールズ軍を率いてレナルフを支援した。また、レナルフの姉妹と結婚し、レナルフの義理の兄弟となってもいる。3 回の登場は回数は少ないが、チェスター修道院の権益の包括的な承認証書への証人として、またグロスター伯ロバート没後のマティルダ側の有力貴族たちが集まっていた機会を示す証書へも登場する。

カドワラドゥルの証書への登場により、ウェールズ境界地域を支配するチェスター伯としてのレナルフ 2 世の、ウェールズ内部との積極的な相互関係がうかびあがる。

（２）分析

まず、証書への登場が示すのは、レナルフとその人物が土地保有関係を持っていたということに限らない。また、その関係は変化していたことが確認できた。今回とりあげたノルマン・ド・ヴェルダンのように、新たにレナルフ 2 世のネットワークに入ってきた人々がいた。またノルマン・ド・ヴェルダンやウィリアム・フィッツアランの例にあるように、ノルマンディでの地域的つながりが由来と考えられるようなネットワーク形成も見受けられる。そして、ウィリアム・フィッツアランとの関係にみられるように、「どちらかの陣営につく」という形で態度を明確に必ずしもしなかった人々の存在があらためて意識される。先行研究が代表的に示したように、レスター伯ロバートとの利害調整は、支持する相手を考えれば対立していた可能性の高い彼らが、どちらの側を支持するということを脇におき、自分たちの所領から考えて安定をめざしたものと言えるだろう。

これを、柔軟性にとんだネットワークの実態、と考えることはできないだろうか。私利私欲のみを追求した、あるいは、自らの権益の維持拡大に汲々としていた、という理解は一面でたしかに可能であろう。しかし、現実には、人間関係の様々な要素を利用し、様々なネットワークを築き、それによって利害を確保しながら、支持を得ながら、支配を進めていたと考えられる。そして、その関係がより具体的で継続性のある、土地保有関係、姻戚関係に進むことは多いに考えられるだろう。

今回の研究課題の成果は、残念ながらレナルフ 2 世の宮廷に集った人々の全体像を明らかにするには至らず、集った人々の様々な様相の一端を指摘するにとどまる。

最後に今後の展開を述べておく。まず、チェスター伯ヒューの家臣団については、ドゥームズデー・ブックをもとにしたクリス・ルイスの優れた研究がある。初代のヒューの世代の家臣団と、レナルフの世代の家臣団の比較をすれば、どのように家臣たちが安定的にチェスター伯集団に継続的に加わっていったのか手がかりを得ることができるかもしれない。あるいは、証書に登場するだけの人々、土地保有や姻戚関係といった関係を持っている人々との差異についても何等かの知見を得る可能性がある。今後の課題にしたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中村敦子	４．巻 36
２．論文標題 チェスター伯ヒューとその封臣たち－ロバート・オヴ・リズランを中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛知学院大学人間文化研究所紀要　人間文化	６．最初と最後の頁 111-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村敦子
２．発表標題 チェスター伯家によるチェスター修道院、サンテヴルール修道院、ベイジングワーク修道院への寄進をめぐって
３．学会等名 西欧中世史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村敦子
２．発表標題 チェスター伯レナルフ2世（1129-1153年）再考
３．学会等名 第91回西洋史読書会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 高田京比子、田中俊之、轟木広太郎、中村敦子、小林功	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 488
３．書名 中近世ヨーロッパ史のフロンティア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

人間文化研究所所報第48号2022年 「フェカン修道院とスタニング- ウィリアム征服王証書から」pp8-10. 人間文化研究所紀要『人間文化』第38号2023年 「「ウィリアム征服王の時代」を考える－Benjamin Pohl ed., A Cambridge Companion to The Age of William the Conqueror (Cambridge, 2022)」pp.50(129)-40(139).

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関